



TITLE:

日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

---

CITATION:

本庄, 榮治郎. 日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム. 經濟論叢 1915, 1(1): 145-149

ISSUE DATE:

1915

URL:

<https://doi.org/10.14989/126857>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

# 經濟論叢

號一第

卷一第

## 論說

●貧富問題(一)

法學博士

田島錦治

●でうゐつゝ・ひゆーむノ經濟學說(一)

法學博士

福田德三

●地代ノ性質ニ就テ

法學博士

戸田海三

●地方財政ノ調整

法學博士

神戶正雄

## 雜錄

●減債基金ト鐵道資金

法學博士

小川郷太郎

●獨逸ノ自治制ニ就テ

教授

財部靜治

●戰爭ト社會問題

講師

米田庄太郎

●津村博士ノ國民經濟學原論ニ就テ

法學博士

河上肇

## 雜報

●租稅ノ新傾向

法學博士

神戶正雄

●佛國ノ外國放資

法學博士

小川郷太郎

●佛國植民地ノ現勢

助教授

山本美越乃

●著名ノ婦人ニ關スル統計的研究

法學博士

河上肇

●麥ノ收穫ト米價

講師

高田保馬

●最近人口靜態統計

法學士

大山壽

●日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム

法學博士

本庄榮治郎

●和田垣教授在職二十五年祝賀

法學博士

神戶正雄

●Robert Meyer 逝ク

法學博士

小川郷太郎

●びにーる・るろわ・ばーりゆー氏ノ陳亡

法學博士

織田萬

## 日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム

法學士 本庄榮治郎

近來國書覆刻ノコト盛ニ行ハレ稀書珍籍トシ  
テ知ラレタルモノモ之ヲ閱讀シ得ル機會多クナ  
リシノミナラス、容易ニ座右ニ備ヘテ日常之ニ  
親ミ得ルニ至リシコトハ吾人ノ至幸トスル所ナ  
リ。殊ニ日本經濟叢書ガ徳川時代ニ於ケル經濟  
書ノ刊行ヲ企テ吾人ヲシテ容易ニ同時代ニオケ

ル經濟思想ヲ玩味シ得ルニ至ラシメシコトハ吾人學徒ノ大ニ感謝セザルヲ得ザル所ナリ。今ヤシノ業着着進捗シ既ニ豫定計畫ノ大半ヲ終ラントス殊ニ五月末配本セラレタル同書第十二卷ニ就テハ注意ニ値スルモノ少カラザルヲ覺ユ。今少シクコレヲ述ベン。

同書ニ收載スル所ノモノハ林子平ノ富國策及ビ上書、本多利明ノ經世秘策ノ全部及ビ西域物語、土生熊五郎ノ鑿不恤緯及ビ船舶考、青木定遠ノ答問十策、司馬江漢ノ春渡樓筆記、植崎九八郎ノ土書及ビ賤策雜收ノ諸篇ナリ。而シテコレ等諸篇ニツイテ注意スベキコトハ、

一 寛永ノ鎖國以來外國トノ通商ハ僅カニ支那和蘭ノ二國ヲ限リ次第ニ衰微ノ運ニ向ヒシト雖、西洋事情ハ尙貧弱ナガラモ長崎ナル關門ヲ通ジテ和蘭人ニ依リテ我邦ニ注入セラレ、吉宗以後蘭書ノ禁ヤ弛解シタルヲ以テ少數達識ノ士ハ常ニ外國ノ事情ニ注意スルヲ怠ラザリキ。殊ニ安永天明中外船ノ北邊ニ航スルアリ。外ニハ異國トノ關係漸ク一變セントシ、内ニハ人心

ノ變移益益顯レントス。蓋コノ時期ニ於テ外ヨリ受ケタル刺激カ我國民ノ生活、思想ノ上ニ及ボセル影響ハ實ニ渺少ニ非リシ也。サレバ世ヲ舉グテ鎖國ノ夢ヨリ醒メザル時ニ當リテ既ニ早ク或ハ開國進取ノ論ヲ立テ或ハ邊防ノ忍諸ニ付スベカラザルコトヲ說ケルモノ少カラズ。今本卷ニアラハレタル諸篇ニ就テ之ヲ見ルニ、開國論者トシテハ本多利明、土生熊五郎、司馬江漢ヲ舉グベシ。殊ニ利明ノ如キハ開國進取ノ說ヲ高調シ、富強ノ根源ハ外國貿易ニ在ルコトヲ說ケリ。而モコノ外國貿易ヲ隆盛ナラシムル爲メニハ海運ノ發達ヲ期セザル可ラズ。然ルニ當時ノ民營制度ノ下ニ於テハ到底コノ目的ヲ達スルコトヲ得ズ、故ニ航海ノ發達安全ヲ計ルガタメニハ是非共海運官營ヲ實行セザル可ラズトナシ、ソノ外國貿易ト國家萬能の見解トハ確カニカノ『メルカンチリズム』ノ思想ニ彷彿セルモノアリ。又蝦夷ニ對スル政策ノノ機宜ヲ誤レルコトヲ痛鑒シ植民政策ヲ確立シ、邊境ヲ防備スルコトハ一日モ忽ニス可ラザル焦眉ノ急ニ迫レル間

題ナルコトヲ説キ蝦夷ヨリ進ミテかむさすかニ及ビ更ニ北米大陸ニ翼ヲ伸ヘ、又山丹滿洲ニ及ビ貿易ノ利ヲ占メ領土ヲ擴張スベシトテ一種ノ帝國主義的見解ヲ披瀝シタリ。ソノ進取邁往ノ意氣盛ナルヲ見ルベキ也。而シテ上生熊五郎ノ説ハ利明ノ説ニ負フ所少カラザルガ如ク、殊ニ船舶考ニ至リテハ利明ノ海運論ヲ再ヒ聞クガ如キ感アリ。又司馬江漢ハ我國洋畫家ノ祖トシテ有名ナルガ、露國ト通商ヲ開クノ必要ヲ説キタリ。尙コレ等ノ學者カ何レモ蘭學ノ系統ヲ引ケルモノナルコトハ大ニ注意スベキ點ナル可シ。

(二) 三國通覽海國兵談等ヲ著ハセシ林子平ハ利明ト同シク邊防論者ニシテソノ論頗ル時流ニ卓越セルモノアリ。又子平ハ開國論ノ先鞭者トシテ有名ナル工藤球郷ト親交アリ且ツソノ邊防論ノ如キモ球郷ニ負フ所多カリシト雖、利明ノ如ク明カニ開國貿易ヲ主張スルニハ至ラザリシガ如シ。

(三) 以上ノ如キ開國進取ノ思想ニ對シテ舊來ノ保守的思想ヲ代表セルモノハ青木定遠ノ答問

十策ナリ、先ツ和蘭トノ貿易ハ『彼ニ莫大ノ利アリテ我ニ寸釐ノ益ナキノミニアラズ大ナル害アリ』トシ利明ノ如キ外國貿易ハ貿易兩當事國ヲ利ストノ思想ヲ有セズ、又露國トノ交易ニツイテモ、ソノ禍心アルコトヲ説キ、目下ノ我國ニハ交易ヲナスベキ物産ニ乏シキヲ以テ五十年後ニ至リ國用餘リアレバ貿易ヲ許スベシトシ、尙他ノ條件ヲ提出シ若シ之ニ應ゼザレバ『一船悉ク成敗スベシ』ト論シ、和蘭トノ交易ヲ絶ツモ尙外國事情ヲ知ルニ困難セズトイヘリ。植崎九八郎モ又邊防ノコトヲ説キ、外國貿易ニ及ヒ殊ニ金銀ノ流出ニ對シテハ代物易ヲ以テ之ヲ救フベシトナシ、琉球薩州間ノ貿易ノ必要ヲ説キタリト雖、唐蘭貿易ニツイテハ藥種ノ如キ我國ニ產セザルモノハ己ムヲ得ザル所ナレドモ他ノモノニアリテハ我國產ニヨリテ用ヲ辨ズルノ必要ヲ説キタルヨリ見レハ、未ダ利明ノ如キ進歩セル貿易思想ヲ有セザリシカ如シ。

(四) 尙爰ニ注意スベキコトハ國產獎勵ノ思想

是レ也。吉宗將軍ガ殖産興業ニ力ヲ盡セシコトハ世人ノ熟知スル所ナルガ、ソノ後ノ經濟學者モ多クコノ點ニ留意シ、各地ニオケル特産物ノ發達、富源ノ開發ヲ論ジタルモノ少カラズ。而シテコレ等ノ國產獎勵論者ガ國富ノ増進ヲ以テ終局ノ目的トセルコトハ同一ナレドモ、ソノ中ニハコレニヨリテ輸入ノ防遏、輸出ノ獎勵ニ資スベシトセルモノト、カクノ如キ貿易關係ニハ考慮ヲ費サズタダ國用ノ豊富ソレ自身ヲ以テ目的トセルモノトノ別アルベシ。而シテ利明カ説ケル所ハ前者ニ屬シ、林子平カソノ上書ニ於テ地利ヲ盡シ産物ノ増殖ヲハカルベシトテ詳論セル所ノモノハ蓋後者ノ部類ニ屬セン。

(五) ソノ他社會階級間ノ關係ニツイテハ殆ント鎖國の狀態ヲ維持セシ當時ニ於テ農本思想盛ニ行ハレ、商工ヲ末技トシ農民ノ疲弊ヲ以テ最モ憂フヘキ現象ナリトセシコト、又財政上ノ問題ニツイテモ當時ノ學者カ財政ヲ私人經濟ト同様ニ先ヅソノ收入ヲ量リテ後、支出ヲ制スベシトセルコトハ、何レモ通有ノ思想ニシテ本卷

ニアラハレタル諸篇ニ於テモ之ヲ見ルコトヲ得ベク、尙貨幣論、米價論、人口問題等ニツイテモ論議ヲナシ卓拔ナル見解ヲ立テタルモノアリ。殊ニ利明ノ説ケル貨幣論ノ如キハ最モ進歩セル思想ヲ代表セルモノナル可シ。

之ヲ要スルニ日本經濟叢書第十二卷ニ於テハ徳川時代經濟思想ノ發達ニ就テ一ノ注意スヘキ事實ヲ示セリ。蓋徳川時代ニオケル經濟學説ガ支那ノ政治經濟思想ニ基ク所大ナルヘキハ異論ナキ所ニシテ、當時ニアリテハ漢學者ハ勿論、國學洋學ニ志セルモノ或ハ僞儒市民ノ如キ者ト雖漢籍ヲ讀ミ支那思想ノ影響ヲ受ケシ所少カラザルナリ。然リト雖モ單ニ支那學説ノミナラズ、洋學ノ影響モ亦實ニ輕視ス可ラサルモノアリ。所謂蘭學者ノ中ニハ外國ノ事情ヲ説キ、彼レノ經濟政策ヲ論ジ、之ヲ我國當時ノ狀態ニ比シテ革新ノ要ヲ絶叫セルモノアルガ如キ、ソノ影響如何ヲ察スルコト敢テ難キニアラザル也。サレバ徳川時代ノ經濟思想ノ源流ヲ單ニ一個ノ支那學系統ニ求ムルノ非ナルハ明カナル所ニシテ、他

ニ尙幾多別異ノ系統アルコトヲ拒ム能ハザルベ  
ク、少クトモ洋學ニ淵源スルモノアルコトヲ認  
メザルヲ得ザル可シ。尤蘭學ノ系統ヲ引ケルモ  
ノト雖、シノ學說必ズシモノナラズ、或ハ開國進  
取ノ說ヲ立ツルアリ、又舊來ノ學說ヲ奉ジ保守  
ノ說ヲ立テシモノアリ。今本卷ニ於テソノ一例  
ヲ求メンカ、本多利明ノ經世秘策、西域物語ト青  
木定遠ノ答問十策トヲ舉グルコトヲ得ン。殊ニ  
利明ノ經濟說ニ至リテハ篇中卓拔ノ識見、奇創  
ノ論議ニ充テ一讀痛快ヲ覺ユ。余ハ嘗テ『日本文  
庫』ニヨリテ經世秘策ヲ通讀シテ以來、利明ノ經  
濟說ニ興味ヲ感スルコト深ク、今ヤ西域物語ヲ  
讀ミテ益ソノ感ヲ深クシ、尙『蝦夷土地開發愚存  
之大概』ト題スル寫本ヲ内田博士ノ好意ニヨリ  
テ一讀スルコトヲ得タルヲ以テ他日利明ノ經濟  
說ヲ綜合シ之ヲ再論スルノ期アル可シ。以上述  
ブル所、必スシモ日本經濟叢書第十二卷ニアラ  
ハレタル經濟思想ノ全部ヲ紹介セルモノニアラ  
ズ、コレヲ通讀シタル際ニオケル感想ノ一二ヲ  
叙シタルニ止マル。讀者諒焉。